

しての輝かしい一步を踏み出したが、30代の約10年間は結核闘病に潰え、終戦を迎えている。さらに娘婿が三島由紀夫であったため、三島の自決はその後の杉山の生き方に少なからず影響を及ぼしたと考えられる。杉山の作品には生涯を通じて永遠なるものへの希求が見られるが、同時に彼には「乾いたものへの希求」が併存しており、「乾いたもの、乾いた大地」への希求は杉山独特の精神構造が影響していると考えられる。杉山が初めて中国を訪れたのは結核療養中であり、『エウロペ』を発表し、抽象画の時代を迎えた後、寺田は造形表現の明確な手がかりを失おうとする絵画崩壊の危機にあったのではないかと指摘しており、杉山は初のエジプト取材に旅立った。娘婿の三島由紀夫が自決した後、杉山は文化功労者として表彰されるが、1976年には公的立場から身を引き、再び沈黙の時代に入る。その後、カッパドキアを幾度も訪れ、たゆまぬ創作活動を続けていた。杉山が人生の岐路に立ったときに選り取った空間が中国、エジプト、トルコといった荒涼とした風景に巨石がそびえる土地であった。人間の住む世界とは距離をとり、精神内界に浸潤してくる悲しみや不条理に対する向けようのない憤りを包摂してくれる庇護的空間として乾いた大地を選んだのではないだろうか。

杉山には精神的不調をきたした明確な記録はなく、精神科受診歴もない。幼少時における父との死別、絵画の父である松岡との死別、結核罹患による12年間の闘病、娘婿・三島由紀夫の自決など、その人生は決して平坦なものではなかった。一方、若くして画壇の頂点を極め、晩年においては文化勲章を受章するなど、世俗的栄華も極めている。しかし、杉山は俗世間から身を引き、永遠なるものと乾いた大地を求めて雄大な表現のたゆまぬ探究を続けた。脱世俗の世界に生きることを好む統合失調気質が人生の困難時において「退却」を厭わず、静かに潜伏することにより、結果的には心身の安定を維持し、地道な創作活動と長寿を全うすることに繋がったのではないかと考えられる。杉山は非凡な健康人であり、気質的には統合失調気質であったと考えられる。

## 15. ガリレオ・ガリレイ

——ルネサンスの残照を生きて——

早野泰造

(旭会・和歌浦病院精神科)

父：ヴィンチェンツィオ、母：ジュリア・アマナティとの間で、1564年2月15日、ガリレオが誕生した。1581年、ピサ大学医学部に入学したが、3年半後に中退した。1589年、ピサ大学数学教授となった。ガリレオの関心は運動学にあった。1592年、パドヴァ大学数学教授となった。マリナ・ガンバと内縁関係となり3人の子供を設けた。1604年、振り子の法則と落体の2乗則を得た。当時、ガリレオはリュウマチ性関節炎に悩まされていた。1609年、望遠鏡を造り、月の表面が凸凹であることを発見し、木星の4つの衛星を発見した。翌年にはトスカナ大公付数学者・哲学者となった。故郷に戻っても、寒気、吐血、便秘が続き、虚弱感、憂鬱、意気消沈があり、閉じこもり臥床していた。1612年、ローマで「太陽黒点についての手紙」が出版された。1914年にドミニコ会がコペルニクス説を弾劾した。1623年、旧知のバルベリーニがウルバヌス8世教皇に選出され、楽天的となったガリレオは「天文対話」を執筆し、フィレンツェで出版した。半年後、異端の疑いで異端審問所から有罪の判決を受けた。判決は、「天文対話」を禁書にするとあった。1633年、アルチェトリの自宅に戻った。1638年に全盲となり、腎臓痛と微熱に悩まされた。1642年1月8日アルチェトリで死去した。30年が過ぎてやっと埋葬が許可された。「天文対話」が禁書目録から外れたのは1757年、1992年になってヨハネ・パウロⅡ世がガリレオを有罪とした誤りを認めた。ガリレオは最後のルネサンス人、中世的科学者であった。研究の基盤を権力者のスポンサー行為でまかなった。ガリレオ事件はこれに起因している。病跡学的診断では、性格の偏奇はあっても、持続的な精神の病は否定される。

## 16. 日本史のルネサンス

——網野善彦の作った楽園——

奥村克行<sup>1,2</sup>、松岡尚則<sup>1,3</sup>

(1 公益財団法人研医会、2 東京武蔵野病院、

3 東邦大学東洋医学研究所)

網野善彦(1928~2004)は日本史学を革新した歴史家であり、その影響は学問だけでなく社会全般に及び

一般の人々の日本史に対するイメージを大きく変えた。戦後の日本史学は所有、生産、階級の関係や剰余価値説等を基盤とする唯物、進歩史観からなるマルクス主義歴史学が主流であり、教育、メディアとも関係し強力なイデオロギーとして機能した。その理論は「百姓」を農民と同一視し、江戸期以前の人口の9割を定住稲作農民が占めるという通念に依拠していた。網野はアジュールや山野河海を遍歴する漂泊民の研究から百姓の中に農民ではない「非農業民」が存在することを明らかにし、百姓と農民は同義ではなく農民は人口の3～4割程度を占めるに過ぎないことを示した。重大な過誤を発見することで日本史学への反省と検証の必要性を提示した上で代替する新たな理論を創造した。それは唯物史学のような「有縁」「有主」に基づく歴史理論とは異なる「無縁」「無主」の原理に基づく従来の理論を相対化し得る理論であった。またその他にも日本史に転換、逆転、打破、脱構築と構築、相対化を行い、政治・事件史から社会史への転換、陸中心に考えられてきた歴史への海からの視点の導入、東西で異なる制度と日本列島の多様性、14世紀の自然、人間、技術の関わりの変化と歴史区分の変更、考古学、民俗学等との学際研究、襖や屏風の裏打ちや絵巻物等の私的文書を資料学へ導入し公的文書に記載がないため対象とされずにいた様々な要素を歴史学に加える等、日本史学を豊かにした。

網野は山梨の名家に生まれ、イギリスをモデルに作られた新しい官立7年制の学校を出て東京大学へ進学し渋沢敬三の常民文化研究所に勤めた。学生運動や国民的歴史学運動等に没頭したが挫折し、高校教師をしながら東大の史料編纂所で研究を続け名古屋大学を経て神奈川大学の教授となった。多様な人と関わりながら著作を発表し啓発活動を行った。

## 17. 日本の医療の礎を築いた長谷川泰の創造性

金川英雄  
(横須賀市立うわまち病院、昭和大学精神科)

呉秀三の精神科領域の二大双書『精神病患者私宅監置の実況』と『わが国における精神病に関する最近の施設』は、呉が渾身をこめて明治、大正の医学のあらゆることを書いた。精神病患者監護法成立時の内務省衛生局長は長谷川泰とあり、詳しい経緯が書かれている。呉はこの法律に一応の評価を与えている。2014年7月、精神病患者監護法に重要な役割を果たした長谷川泰

が生まれた長岡市に現地調査に行った。「長谷川泰を語る会」の会長恩田利平太、富太氏の協力を得た。ご当地マンガも出て、大変な売れ行きである。下水道の普及等に尽力したことが述べられている。

長谷川泰で有名なのは、済生学舎の創立だろう。済生学舎は医師国家試験の予備校である。野口英世はこの卒業生で、日本医科大学は済生学舎が発祥としている。済生学舎の歴史的意義は、江戸時代までの医師自己申告制から、医学教育、国家試験制への橋渡しをしたことだ。その制度を側面から大きくサポートした。国家試験ができてでも年間合格者が数人では制度が崩壊したと考えられ、学生の教育水準を大きく引き上げた。地元の展示に長谷川は、京都帝国大学の創立を提議したとある。内務省衛生局長には、明治31年(1898)3月、57歳で就任する。5年の任期中に101の法案を立法化し、その中に精神病患者監護法もあり、これが最大の功績だろう。

生まれた風土の分析も報告した。長岡市は信濃川が弥彦山にぶつかり、海岸線と平行に流れるため洪水が起きやすい。水が低地に溜まり、伝染病の温床、眼病や赤痢、チフスなどの流行病が多発した。若い頃幕末戊辰戦争で長岡藩軍医として従軍した。司馬遼太郎の『峠』で有名な河井継之助が長岡藩の藩政改革に成功、新式銃と機関銃があり長岡藩は頑強に戦い、三ヶ月に及んだ。亡くなってから、東京の湯島天神に銅像ができた。太平洋戦争末期の銅像供出にあったが、地元で2013年4月18日銅像再建。

## 18. 能「隅田川」にみる元雅の現実と理想

河崎 博  
(穂積すこやか診療所)

観世元雅は世阿弥の嫡男として生まれ、能役者、能作者として活躍し、親子の別れを主題とした能を多く作っている。元雅が30代の若さで亡くなった時、世阿弥はその死を深く悼んでいる。ここでは元雅の能「隅田川」をとりあげ、元雅の父子関係を中心にその生き方を考察する。

能「隅田川」は伊勢物語の東下りにある在原業平の都の妻を思って詠んだ「名にし負わば」の歌を踏まえて作られているが、能では都から狂女が亡き子を探し求めて隅田川までやってきた話になっている。隅田川を渡ろうと狂女が渡し守に乗船を頼むが、渡し守はすくには乗せようとしぬ。渡し守の言葉に反応して狂